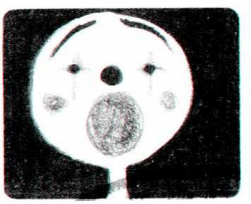
いつも音楽があった

倉本 聰



文藝春秋

著者略歴

昭和10(1935)年東京生れ。東京大学文学部美学科卒業。34年ニッポン放送入社。37年に退社後，シナリオ作家として主にテレビドラマを執筆。代表作に「文五捕物絵図」「前略おふくろ様」「6羽のかもめ」「浮浪雲」「北の国から」「波の盆」「昨日，悲別で」等がある。著書には「さらば，テレビジョン」「新テレビ事情」「新・新テレビ事情」「北の人名録」「北の国から」「倉本聰コレクション全30巻」等多数。

いつも音楽があった

昭和五十九年七月十五日　第一刷
昭和五十九年八月　十　日　第二刷

定価一〇〇〇円

著　者　倉本聰

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二三
電　話　(〇三)二六五―一二一一
郵便番号　一〇二

印　刷　精興社
製　本　加藤製本

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Sō Kuramoto 1984　　Printed in Japan

いつも音楽があった——
それらの小さな記憶の背後に。

掲載誌

「カイエ」昭和53年7月号～55年1・2月号、「オール讀物」昭和56年4月号～59年3月号連載分から40篇を選びました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつも音楽があった／目次

アカシヤの雨が止む時　11
カモナマイハウス　16
同期の桜　21
TEACHER'S PET　26
タコ八の歌　31
主われを愛す　37
銀座の雀　42
私は泣いています　48
赤とんぼ　53
モルダウ　59

茶色の小瓶　64
紀元二千六百年　69
讃美歌四八九番　74
カムカムエブリボディ　80
露営の歌　87
真夜中のギター　93
蘇州夜曲　102
轟沈　108
セントルイス・ブルース　114
聖しこの夜　120

鐘の鳴る丘 126
仰げば尊し 132
星の流れに 140
結婚行進曲 147
乙女の祈り 154
この太陽 160
ふじの山 167
加藤隼戦闘隊 173
ディアボロの唄 180
工場だ機械だ 187

ウナセラ・ディ・東京　197
夜来香（イエライシャン）　203
お山の杉の子　210
白鳥　219
「？」　226
ボタンとリボン　234
カチューシャ　242
鱒　252
冬の旅　262
讃美歌二七三番　271

装画　三谷　昇

AD　坂田政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつも音楽があった

日本音楽著作権協会(出)許諾第八四六五〇二三—四〇一号

アカシヤの雨が止む時

アカシヤの　雨に打たれて
このまま　死んでしまいたい

この歌をきくと涙が出るという男たちが僕の周辺にわんさといます。いわゆる60年安保挫折派。その後見てますとみな相応に歳をとり、髪など薄くなり、人事異動を気にしつつゴルフのハンディも気にしている、即ちわが日本国の高度成長に夫々(それぞれ)どっぷりつかりこんでいて今やあの挫折はどこへ行ったか、このまま死んでしまいたかった筈がルームランナーなど買いこみまして、しっかり長生きを願っとるわけでありますが、それでも時折深夜のバーなどで有線放送からなつかしや、西田佐知子など流れてきますと突如バンと立ち、目を血走らせて、
「これ！　アカシヤの雨！　60年挫折、我らのテーマ!!」などとソプラノで叫んだりするわけであります。しかし又それからものの五分とたたぬうちにマイク片手にピンクレディなど絶唱して

おりますからわが同世代は信用ならない。
扨。それではこの歌小生にとって果して挫折の歌であったかと訊かれるなら、やっぱり挫折のテーマだったンですね。但し、小生の味わった挫折は並みの挫折とは一寸ちがった。自分なりにはシビアだったんだが、人にしゃべるのは恥しいンです。

「×時現地で落合おう」
Sが我々に申しました。
「新劇人のデモ行進は多分×時前後に日比谷を出る筈だ。みんないるからすぐ判る」
Sは小生の属していた劇団Nの舞台監督をしている男であります。劇団の中でもいつも行動を共にしていた我々若者のグループは、その日新劇人協議会の呼びかけに応じ安保反対のデモ行進に全員参加する予定でありましてその相談をしているわけであります。
「判った。×時現地でな」一同やや緊張してうなずきます。小生も取り敢えずうなずきました。うなずきつつチラと片隅を見ます。そこには当時我々全員の憧れの的でありました若き清純派女優A子さんがいつものようにひっそりとおりまして、美しい顔で手帳を取り出し「×時現地」などと書き入れているわけであります。それを見ながら小生の心は実はズキズキと疼いております。何故なら——みんなの手前、行くとうなずいてみせてはいるものの、小生実は行かないのであります。いや行けないのであります。小生仲間を裏切るのであります。

小生が劇団に所属したのは大学一年の時であります。しかし大学を卒業するに当り、そのまま劇団の文芸部員として食べて行く自信のない小生はその一年前就職試験を受け、劇団所属は伏せたまま株式会社ニッポン放送の禄を喰むこととなったわけであります。即ち二足のわらじであります。しかるに当時このニッポン放送、財界の息がばっちりかかっておりまして、組合なんぞ存在しません。政治運動なぞしようものなら、即時即刻馘であります。そんなところへどうして小生のような左翼っぽい劇団に籍のあるものが入社出来たかと申しますと、そこはそれ例のアレでありまして、やさしい先輩が面接の際の答え方などを懇切丁寧に教えて下すった。芝居をやっておりました関係上セリフの暗記法には心得があります。教えられたセリフをそのまましゃべった。面接試験官の中央におられました当時専務の鹿内信隆氏が何故かニヤリと笑われまして「君の答は吉田茂氏の意見と全く同じだが」と仰せられ、小生ドッと汗を吹き出しつつ、「や、吉田さんも同じことを――」などと口走り並居るお偉方の哄笑を買う始末。それでも採用されたんですからニッポン放送はすすんでおります。閑話休題――。

アカシヤの雨がかすれた声で低く壁ごしにきこえております。ここはニッポン放送のいわゆるテープ編集室と申しまして、暗い廊下をはさんで半坪程の独房風小部屋がズラリと両側に並んでおります。

トントンとドアをノックして同期のTが入って参りました。折りたたみ式の椅子を拡げると小生のそばにくっつくように坐ります。

「どうした」
「大変だ。デモ隊がわが社を襲う気らしい」
小生ギクッとTを見ます。
「知ってるだろう？　昨日報道のミヤちゃんがやられたの。デモ隊はわが社を目の仇にしてる」
実はその前日、樺美智子さんが死亡した国会前のあの騒ぎの中で、右寄りだといわれるわが社の報道陣はデモ隊から完全に敵視され、報道記者の威勢いいミヤちゃんは中継中に車をひっくり返され、そのひっくり返った車の中から泣きそうな声で現場中継を行なったわけであります。それは我々内部の者からみると、悲痛とこっけいの極致であり「ア、今デモ隊が、私の真上を、アッ、こわれる！　アッ、つぶれます！　つぶれます！　ゆすらないで！　ふまないで！　アッ、アッ」といった、まさに臨場感あふるるもので。
「上の連中がさっき話してたぞ。社を出る時はバッジを外せって。バッジつけてるとやばいらしいぞ」声をひそめてTが申します。
二階上の制作の部屋に上ると、一同仕事が手につかぬかに見受けられます。あちこちにあるラジオの前に、みな何となく固っております。その静寂をつき破るかのように、ヘルメットに身をかためた報道の連中がドヤドヤと興奮して帰ってきました。
「どうだ！」
「駄目だ！　危くって近寄れない！　右翼まで出てるんだ。右翼がデモ隊にトラックごとつっこんだ。丁度新劇人のデモ隊の真中らしい。ひかれて死んだ者が出たらしいぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com